

大人のための 歯科講座

（歯科治療の新潮流）

=⑪=

前回はコンピューターガイドシステムについて紹介させてもらい、そこには40～50年の歴史があります。

インプラント治療は1970年代にスウェーデンを発祥として世界に広まり始め、およそ10年単位で進化しながら、急速に普及してきました。大きな流れをまとめる1980年代の「外科主導の時代」、1990年代の「補綴主導の時代」、

す。

1990年代に入ると「骨を作る」「骨を増やす」という手法が数多く紹介され、「理

想的だと考えられる歯

骨につき、咬むという機能回復ができるだけ長いインプラントができるだけ多くの半年以上の治療期間を設けて行っています。

機能回復ができるだけ長いインプラントができるだけ長いインプラントの位置にインプラントをまっすぐ入れるべく、「骨を増やす」という補綴（かぶり）治療が主流になりました。その考え方は今でも当然尊重されているのですが、理想的な位置に骨が十分存在する

主流になってしまった。その考え方は今まで変わません。同じ術者が同じようにやつたりと課題を残しました。また骨を新たに作るというのは簡単なことではないことは今まで受けたかによっても印象は違うと思います。

もうすでにイン

ンプラント治療

を受けられた方

も多くのいらっしゃる

た。そのため、ほとんどのインプラント治療への

ことはむしろ稀な

要となつてきました。

これが審査です。

2000年代に入

り、患者さんにできる

だけ楽に短期間で機能

回復できる手法が考え

られるようになつてき

がつまきました。これについて

いけば審査です。

次回から述べたいと思

います。

能的にも

ルーセントデンタル

クリニック

名古屋市

西区牛島町6の1・名

古屋ルーセントタワー

3階、電話052・9

08・8555・UR

L www.lucsent-dc.

治療の歴史的変遷

そして2000年代からの
「患者主導、
低侵襲の時代」と分類で
きます。

1970s

80年代は簡単

に言えば、イン

プラントが骨にしつ

かりくつつきさえすれ

ば良いという時代とい

えるかもしれません。

まだ診断機器や診断基

準も乏しく、骨が十分

あるところに、できる

だけ粘膜を大きく開けて行っていました。

インプラント体のチ

タン表面はまだ現在に比べると骨につきにく

い性状であったため、



初期の機械研磨
表面のインプラント



現在の表面に粗面加工されたインプラント。
タンパク質吸着、血小板活性化、骨芽細胞増殖・分化
を促し、以前の機械研磨のインプラントに比べ、骨と早期にくっつきやすくなっています。

10年単位で急速進化 時代ごとに違う印象

10年単位で急速進化時代ごとに違う印象

ルーセントデンタル
クリニッカル副院長
後藤 英夫



＜略歴＞ 1998年、東京医科大学歯学部卒業。名古屋大学医学部遺伝子再生医療センター医員、国立寿医療センター歯科口腔外科勤務などを経て、2008年からルーセントデンタルクリニック副院長。